

# 生涯の垣根

室生犀星

青空文庫



庭というものも、行きつくところに行きつけば、見たいものは整えられた土と垣根だけであつた。こんな見方がここ十年ばかり彼の頭を領していた。樹木をすくなく石もすくなく、そしてそこによく人間の手と足によつて固められ、すこしの窪みのない、何物もまじらない青みのある土だけが、自然の胸のようのにのびのびと横わつている、それが見たいのだ、ほんの少しの傷にも土をあてがつて埋め、小砂利や、ささくれを抜いて、彼は庭土をみがいていた、そして百坪のあふるる土のかなたに見るものはただ垣根だけなのだ、垣根が床の間になり掛物になり屏風になる、そこまで展げられた土のうえには何も見えない、彼は土を平手でた

たいて見て、ぺたぺたした親しい肉体的な音のするのを愛した。土はしめつてはいるが、手の平をよごすようなことはない、そしてこれらの土のどの部分にも、何等かの手入れによつて、彼の指さきにふれない土はなかつた。土はたたかれ握り返され、あたたかに取り交ぜられて三十年も、彼の手をくぐりぬけて齡を取つていた。人間の手にふれない土はすさんできめが粗いが、人の手にふれるごとに土はきめをこまかくするし、そしてつやをふくんで美しく練れて来るのだ。

若い女中が彼のことをあんなに家にばかりいて、なにが愉しくて生きているんだろうと、裏庭を掃きながら言つていたが、一人の女中はあれでも何か愉しみがあるのよ、庭でしようさといつて

笑った。彼も書齋しよさいにいてそれを聞いてひとりで笑った。つまり彼に最後にのこったものはやはり庭だけなのだ、終日掃きながら掃いたあとのうつくしさが見たいばかりに、そのうつくしさに何かを、恐らくおそ一生いつしやうがい涯の落ちつく先をちらとでも見たいのだ、ばかばかしい話だが、そんなふうに言うより外ほかはない。一生涯の落ちつく先を土に見たつて何になるといえばそれまでだが、掃いたあとを見かえると、いままでにないものが現われている、毎日掃くのだから落葉とかゴミとかいう些細ささいな固形物すら見当らないのに、やはりよごれがあった。その眼にとまらないものを掃き上げると、そこからべつな澄すんだ景色が見えて来ていた。彼はその景色が見たいばかりに掃くのだ、いやなことを心にためておくと、

どうにも心の置場のないような不愉快ふゆかいを感じるが、それを書いてしまふとさっぱりする、さっぱりした心持で何かをあらたに受けいれようとする構えに、するどい動きとも静観ともいいがたいものがある、あいつだよ、あんなふうなものが掃いたあとの、土の上に見られるのである。いろいろなものに取り憑つかれ、さまざまなものに熱中して見たが、行きついて見るとつまり庭だけが眼に見えて来ていた、朝起きてから夕方まで眼の行くところは庭よりほかはない。ある意味でそれは庭であるよりも、一つの空漠くうぼくたる世界が作り上げられていて、それが彼を呼びつづけているのだとでも、ふざけて言つたら言えるのだらう。

彼は猫ねこが庭に出ると叱しかつて趁おつた。猫は庭で過ちつて蝶ちょうとか、と

かげなぞ趁うと、土の上に爪つめあとをのこした。猫の爪あとは土をかみそりの刃はのようにほそく切り、あとで土をあてがってなおそうとしても、切れ傷は深くのこった。だから猫が庭に出ると彼は縁えんがわ側に出で、えたいの判らない言葉で吠鳴どなった。えたいの判らない言葉はえたいのわからないままに、猫は叱られたことを意識に入れた。だから彼の家の猫は庭に下りられぬものに心得、庭では垣根にそうたすみずみをつたって歩き、決して広場の土のねているなめらかな処ところを通らなかつた。猫が庭を歩いてはならぬきまりをつけたのも、彼だったのだ。もちろん、植木やは彼の庭でしごとをする前には、庭の入口で地下足袋じかたびを脱ぬいで、裏にもようない足袋にはきかえねばならなかつた。地下足袋のうらには、じ

ごくのようながじがじした、いやらしい蛇腹じやばらもよう文様があつて、土にくいこ込み、土を一どきにきざんでしまうからである。

彼がはじめてこの土地に家を建てた時に、民さんという男をつかつていたが、どうにも怠なまけ者で朝出の時間が喰くい違ちがつたり、不意に休んだりするので我慢がまんができなくなり、納得な得とくで別れた。

君が来てくれない日はこちらでも仕事に手がつかずに、一日をふいにしてしまう、君ももう判っているだろうから別れようじやないかということになり、民さんも済みませんと素直に素晴らしい出入りしなくなった。それから十何年かが経たつたが、その後、この男が夢ゆめの中にあらわれたことは何十度だか分らない、庭手入れのたびに民さんのことがしじゅう頭にあつた。はじめて家を建て、



庭を作った時の男だから彼には女のようにわすられなかつたのである。女でもこうはゆくまいと思われるくらいだ、ほとんど最初二三年のあら庭の時代には、毎日民さんとあい、木の事、石の事、下草の事をはなし合い、意見をまじえて庭作りをやった。民さんの生あたたかい小便をしているうしろから、どうかしたはずみに、きんたまを見たことがあつた。きんたまは、昼すぎの斜めななの日にうかんで、いろは白かつた。きんたまにも、白いのもあり黒いのもあることを知つたが、この男のぼかんとした放心状態のなかから下つているきんたまは、やさしいなりをしていた。彼はお三時の茶を植木やと一いっしょ緒にしながら言つた。

「君のきんたまは白いね。」

「旦那だんなはいつそれを見たんです。」

「先刻、納屋なやの前で見た。なぜあそこで小便をした。」

「済みません。」

「しかし君にも似合わない色白なきんたまを持っているね。」

「あはは、こいつあ遣やられた。」

「おれはね、きんたまという奴やつはみんな黒いもんだと思いこんでいた、ところがそうじゃない。」

「はは、よくそんなに見なすったものだ。」

「僅わずかな時間でも大切なものはよく見とどけられるものだよ。」

民さんに二番目の男の子ができた時、彼は名附親になりうんと  
気取って、秋彦あきひこという名前をつけてやった。他人の子供に名前

をつけたのがはじめてだった。民さんは植木屋の夏がれどきに八百屋おやをやり、貸シが多くなりもだもだのあげく、長屋のお内儀かみさんの顔をぶん殴りなぐ、その場で巡査じゆんさにつかまって留置場にほうり込まれた。民さんのお内儀さんが来てたすけてくれといい、彼は海岸にある大森警察署に行つて、請人うけにんの印形いんぎようを捺おしてこの男が鉄柵てつさくの中から出てくるのを迎えたむか。はんこを捺して人間の身柄みがらを引取つたこともはじめてだったが、変な気のものであつた。「湯にはいったらどうか。」

「済みません。」

ちようど、品川近くの風呂屋ふろやの前にかかつたからである。

民さんは二三日の留置場の生活がよほど応こたえたと見え、松まつの手

入れをしていながら、ここでこうしていた方がどれだけいいか分らないといった。ああいうところには、二度と行くものではないと、彼も民さんの手つだいをしながら、柔<sup>やわ</sup>らかい日ざしの晩春をたのしんだ。どういふものか民さんはよく顔をこするくせがあつて、泥<sup>どろ</sup>の手で顔をこするのですぐ顔はよごれて、くろくなつた。そのたびに彼は白い少年のようなきんたまを眼にうかべた。

なりの高い早足のこの男とあわない日はなく、はじめて家を建てた時の植木屋というものは、こんなにも親身に可愛<sup>かわい</sup>くなるものかと思われるくらいだった。何をするにも民さん、何を食うのにも民さんというふうに、お昼のお菜まで彼は民さんにわかるようになった。君ちよつと肩<sup>かた</sup>を叩<sup>たた</sup>いてくれとか、雨のふる日は納

屋にはいつて竹の簀子すのこを編もうとか、ある一処にとくさを植え合  
 い顔をつき寄せたり、二人で植木溜うえきだめに行くために奥馬込おくまごめの田た  
 圃道んぼみちを歩き、くたびれると、おい一服しようと土手の草の上に  
 跣しやがんで煙草たばこを喫のみ、ほとんど終日食つ附いて一日をくらししていた。  
 好きになるということは恐ろしいことに違いない、どこにもこの  
 男すくに秀れたところなぞなく、怠こげ者で小汚こぎたないが、受け答えの返  
 事の音が、ずば抜けて早く大声で元気だった。何よりもらくにつ  
 き合える。どういう彼のまわりの人間よりも、らくに民さんとな  
 ら話される、こういうことがかねがね彼に必要であつたし、その  
 必要が民さんによつて、申分なくみたされていたからだ。彼は民  
 さんとのつきあいを男女の關係について考えてみたが、好きにな

るといふことは顔にある器量なんか、しまいにもんだいでなくなることも判つたし、好きといふことは毎日のすることがらが、だらしなく批評なしで解きあえることも、しだいにわかつて来たいた、それに男女間には肉体のつながりがあるから、好きになつたら堪<sup>たま</sup>つたものではない、きらいになるまで続くのであらう、好きときらいと、このふたつの言葉を抛<sup>ほう</sup>り出してしまえば、そのほかの言葉は人間の世界ではいらぬことになる、民さんが女なら彼はもつと好きになつていたのであらう、全くどこがどうということもないのに、何でも聞いてやるようになるものだ。

彼ははじめ篠<sup>しのだけ</sup>竹ばかりを庭のまわりに植えたが、三年経つてから篠竹の庭を壊<sup>こわ</sup>しはじめた。竹はだんだん彼にうるさい思いを

させ、よわよわしい末流の風雅ふうがにつき落されそうで、危なくてひやひやしてならなかった。飽あきることもそうだが、土が見られないのと、土のうつくしさが荒あされることもおもな原因だった。そこで彼の命令によつて民さんは篠竹の株を起しはじめた。たいへんな数の篠竹は二十や三十の株ではなかった。藪やぶ 畳たたみを起す風ふう塵うじんと同様の捲まき起しは、民さんの顔をまつ黒にさせ、株はまるでどうにも手のつけようのないほど山積はこされて行つた。どこにも貰もらい手のない篠竹はとなりの寺の土手に植え、そして後の分は空地あなぞに棄すてることにした。牛うし 車ぐるまで搬はこんだものをもつたいないにはもつたないが、取り棄てるより外に用いようはなかった。一本ものこさずに抜き取つた庭は、がらんとして空あかりばかり

が、あふれてひるがえ翻つた、民さんは言った。

「次に何を植えるんです。」

「次には、……」

彼はなぜか羞はずかしそうに、芭蕉ばしやうをうえるのだといった。その理由はわからないがこの男の前で、いつもあらたに木を植えるときには、なぜか口ごもった遠慮えんりよがちな言い方をしていた。樹木のことでは何でも知っている男の前には、彼といえどもいくらかの羞恥しゆうちの気ざしなしには、ものが言えなかつた。一体、芭蕉はどこに植えるのだといったから、家のまわりに植えるのだといった。そんな芭蕉が大量に集まるかも問題だが、植木溜しろうとにあつてもほんの五六本くらいである、あとは素人買しろうといをして歩かなけ



れば集まらないと、民さんは事の困難なことを仄めかした。池いけが上み本門寺の下寺の庭、馬込界隈かいわいの百姓家ひやくしようやの庭、大森は比較ひか的くてき暖かいので芭蕉を植えるのに、育ちも悪くはないから、こくめいに捜さがし歩いてあそこで一本、ここで二本というふうわに頒わけてもらったり、売ってくれるものなら買いとるように気き永ながにやるほかはなかった。一どきに篠竹の谷をこわして移植したようなわけにはゆかない、あの時も悪場から掘ほり出すのに、まるで竹と毎日すもうを取っていたようなものだと言いった。

芭蕉は間もなくいくつかの森を形取って植えられ、彼はその下をくぐりぬけ生々しい緑を見上げたが、その緑がペンキのようになま新しくて、妙みょうに落みちつきがなくそわそわしたものばかりであ

った。彼は三十何本かある植込みから、芭蕉の広葉の数をすくなくするため、片かたつ端ぼしから広葉を切り落して行つた。そしてそこに見たものは不自然な、がらんとした身にそわぬ明るさだった、こんなつもりではなかつたと、彼は葉かげで無理にもおちつこうと向きをかえようとして見たが、もう彼は完全にこの派手な葉の広い旺おうせい盛せいなものが、庭を一挙に打ちこわしていることに、眼がとどまつた。しかも莖くきも幹も、うそのような旺盛さが、彼のしたことの過ちであることを教えた。

「しまった、こんな物を植えるんじゃないやなかつた。」

「旦那、こいつはね、遠見のもですよ。」

彼ははなれて民さんのいう遠見で引立つことを知つた。芭蕉は

庭の奥にほとんど思いがけない場所に、捨て置きに植えるよりほかはなかった。彼はいったい何を考えていたのだ、何を芭蕉の森からさぐり当てようとしていたのだ、それから先に聞くべきであった。彼は答えることを知らなかった。

「では、抜きますか。」

「君さえ我慢してくればいいんだ。」

「抜いてしましましょう。」

民さんは彼の頭にあることをうまく、言いあててくれた。あれほど六十日の間苦心してあつめた芭蕉を、抜いてしまうために彼は民さんにその言葉をいいあらわすことには、さすがに言うべき度胸がなかった。人間の労力というものが<sup>こた</sup>応えてくるのだ、二三

日後にそれを言ってもいまはそんなことは言えない、幾ら何でも  
まるでめちやくちやみたいなことは、らくにいえるものではない、  
僕はね、こんどは少しの疑いもなく、うまく嵌はまると思ひこんで  
やったのだ、だが、まるでようすが違つてしまつた、君はどうか、  
彼は民さんの返事を待つたが、民さんは居処きこを嫌われたんです、  
こいつはすみの方にいた方がよかつたのですといつた。いどころ  
を厭いやがつていることも判るが、こんな派手なものがどうして好き  
になつたのかと言つたら、民さんは派手なものも、くすんだのもみ  
んな、好きずきですといい、彼もやつとそれを人間くさい解釈を  
して見て笑つた。芭蕉は掘り返され近所のほしい人にも頒け、幹  
のほそい分はそのまま畑のわきに捨てさせた。わずか一本の芭蕉

でも、根土を擁だき込んだ重量は、それが二三本立のものになると荷車につけないと、重くて肩では運べなかつた。彼は掘り返された土のどろどろした、荒こうはい廢の感じをどうまとめるかにも、頭が奪とられた。そして次に起るもんだいは、どういう樹木をその芭蕉のあとにあしらうかということだつた。何を持って来ても呼吸のあわない庭畳には、最後に彼は松よりほかにえらぶべき樹木のないことが、判つて来た。

「松だね、松よりほかにないな。」

「だからわたしははじめっから松だといつたんです。旦那は固くなるからといってつつぱねた。」

「松はいやだがやはり松だね。」

「松は掘り返して棄てるわけに行きませんよ、あいつは金を食う

。」

「溜ために行こう。」

彼は民さんと植木溜に出かけた。大森の奥の奥おくさわ沢というところ  
に、松ばかりの広大な植木溜があつた。赤土の禿はげ山やまや谷をそ  
のままあしらつた松の溜場には、姿を生かしてどんな松でも、お  
もうように選ぶことができていた。永年にわたる松のこしらえは  
どの松を見ても、枝えだをためされ撥ぼちと搦からみ竹をはさみこんで、苦し  
げにしかし亭てい亭ていとして聳そびえていた。ある松は何十年もはりがね  
でしばられたまま、伸のびればしんを折られ、幹ばかり太るような  
しついで生き続けた。ある松はうつ向きに振ねじ伏ふせられ、起

き上ろうとすればいやでも地上を這うような形のままで、勢いをためられていた、しかもある松はいきなり倒れかかるような位置をつづけ、そのなりで固まったふしぎな形相で小さい谷間から、ぶら下っていた。どれにも、人間の手でいわゆる面白いかたちを折檻せつかんされながら、かたちを作っているのだ、それらの松はすべて根元に二人、さきはんしゆつに二人というように人夫四人がかりでないと、搬出はんしゆつできないところの背丈せたけは三四間くらいあった。ある松はわずか六尺しか丈はなかったが、侏儒こびとのようにいじめつくされた枝と幹ばかりが太くなり、不具者のような形態が崎嶇きくとして枝をまじえていた。こんな松がおもしろいという褒め言葉にあずかるのだ。よくいじめた松がよく売られるし市価がつくのだ。

「まるでかたわ者ばかりじゃないか、そこらじゅうで啼なき声が立っているようだ、君は何とも思わんか。」

「旦那のかがえていることはばかばかしいことですよ、わたしなぞ松の溜場にはいると、きゅつとからだしまが緊しつて来るほど快い気持です。」

「ところが僕はここに来ると人間の化ぼけの皮が見えてくるんだ、それぞれに小細工をして生かしているのを見ると、金魚の方がよほどありのまま生きているようだ。」

これらは決しておもちゃの盆ぼんさい栽さいではない、盆栽ふつうでないこれらの松は太さはそれほど眼に立たないが、ことごとく普通ふつうの自然に生えた樹木にくらべると、まずすでに初老のよわいをかさねてい



るのだ。苦しんでいるものは人間ばかりではない、ここにも、軽業芸るわざげいをつくして広大な空の下で、いわゆる、なんにも言わないでいるだま黙っている人がいたのだ、この松どもは、どれを見ても人ですよ、どれも人といっしょにくらして、植木屋のいうとおりになつて育つてきたものどもですよ、民さんのそんな言葉にむ対きあつている松は、なるほど、どれも、人に似ていた、人も人、はりつけになつていようなもの、よこなく横殴りになぐられて倒れかかっている奴、あるいはう飢えて這いつくばい、なお起き上がろうとしているものもあつたが、どれにも、喜びとか、おど踊り上るとかいう歡相のそれがなく、小さな叫びさけごえや啼りすすなきの声でなければ、妙に息苦しいものがあえ喘ぎながら見えていた。樹木というものから悲

しみをおぼえるということは、その形からでは容易にくみとれないものだ、しかしここにある乱立相あいせめ閲いでいる松どもは、淋漓りんりたる悲しいものを人間から与あたえられていないものはない、普通の樹木に決して見られない人くさいものが、立派な形の奥の方で悶もだえているのだ、この悶えのつらいものほど美しい形をととのえてせま迫せまっていた。

「まるでこりや芸者だね。」

「どうして芸者に見えるんです。」

「さんざ吊つられてさ、そのあげくまた売られてしまふところなぞ、よく似ている。」

「苦しめられて休む間がないんですよ、しじゅう根は切られてい

てそいつが治る間がないんだ。」

「幹のいろがもう老年としよりだ、しかも変にそだった年寄だね。」

ここで二本とか三本とか組み合っている松に、しるしをつけて  
買い入れた、蔽おおいかぶさっているものには、それを受けとどめる  
ような形の松をえらび、さらに一本きりで立たなければならぬ  
松には、裏にも表にも、見どころのあるものをえらんだ。

「松をいじくればもうあとに、何も無いな。」

「行きどまりですよ。」

おもちゃはここで絶えていた。翌日から彼と民さんとは、二十  
何本かの松を植え込み、曇くもり日にはゆううつな暗緑のかたまりを、  
庭のまわりに眺めた。落着きはらったものが、どうやら庭をかた

ちづけて来た。この間じゆう、民さんは怠けて朝は遅く、<sup>おそ</sup>どうかすると迎えにやっても、昼頃<sup>ごころ</sup>にならなければ出て来なかつた。彼は庭じゆうをうろうろして民さんを待ち、何度も使を出し、表にかれのやつてくる方向をながめに出た。どの道路からも、植木屋はやって来ないで、彼のむかつ腹は我慢のならないものになつた。部屋に上つて仕事をしようとしても、そんな落ちつきを失つた彼には、書くべきことがらが怒つて<sup>おこ</sup>いるために、片っ端から逃<sup>に</sup>げを打つていた。

庭はまだ出来上つていない、あせればあせるほど、この植木屋さんの朝出の時間が遅<sup>おく</sup>れ、彼自身が迎えにゆくと、やっと起きて出て来て、済みませんというだけであつた。その顔色にゆうべの

酒氣がのこり、寝てから何時間も経っていないしぶしぶした、そんな睡眠不足の眼附だった。こういう幾日かを過してから、彼はこの男と納得ずくでわかれたのである。後でかれの内儀さんが、浅草のどこかに勤めていることを聞いたが、その勤め先に仕事仕舞から晩に出掛けていたらしく、ごたごたがあつて相当永い間、さんは夜も睡れないことがあるらしかった。かれの内儀さんはあさぎいろの皮膚をした、かれの好きらしい、ちよつとどこか女ざかりを見せている女だったのだ。彼はそれきり民さんとはあわず、三年経ち五年経ち、戦争があつて民さんは家を売つて田舎に落ちつて行つた。彼は民さんの代りに来た村さんに、しじゅう民さんの動静を聞いたが、それが彼のくちぐせになり、もう一度民さんと

庭のことで顔をつき合し、たった一言で事を片づける無遠慮な声  
が聞きたかつたし、かれと柔らかい下草を植えるために<sup>かが</sup>踏みこん  
で見たかつた。そんな仕事のあいだに一本の煙草をすう<sup>うま</sup>旨さ、軽  
い<sup>じょうだん</sup>冗談のやりとりをするしたしきは、彼の持つ社会的なこ  
にも見当らない親密なものばかりであつた。彼は妙な男なのだ、  
いちど別れた職人を、機会をえらんで会おうとするのである。彼  
の民さんに対する考えがだんだんに固まつて来たのは、ついこの  
間坂の下で民さんと行きあい、彼はちよつと<sup>おどろ</sup>驚いて一度遊びに來  
るようにいつて、そのまま別れたときから、いつそうかれのこと  
が頭から<sup>はな</sup>離れなかつた。金屑物が金になつて<sup>かなくずもの</sup>いる時分で、民さ  
んは金物をあつめる車を引いているといい、また普通のバタ屋に

なっているという噂うわさもあり、その片手間に植木屋もやっているが、おもに鉄屑買いに身をやつしているということだ、彼はこの話をふんがいするような顔附で、べつの植木屋から聞いたが、黙ってその批評はしなかった。

何か民さんにさせる仕事はないかと、彼は彼の庭をぐるぐる見廻まわしたが、植木も石も入れる余地もなく、職人をつかつて重い石の据すえ附つけに監かん督とくをする気なぞ、もう頭のどこにもなかつた。これに与える仕事はまずない。仕事はすくなくとも纏まとつた金のしごとでなければ、せつかく出してやつても何にもならない訳だ、そんな金のかかる仕事は彼の庭では何一つなかつた。庭はそのままで完成され、どう動かしようもないのだ、樹木は枯かれて行つても、

それはそのまま庭の景色には一向差さしつか支えのないような、他の景色の賑にぎわ合いが補っていてくれた。土を見たい彼には、全く土がしだいに広場をつくり、他の何物にも及およびがたい重ちようじよう畳たるおもむきを加えていたから、樹木の枯れたのには、それに代るものを植え付けようとはしなかった。完成されたものはその内部でこわれていても、外がわの美しさがそれを保っていてくれたからである。

彼は三十年もかかって、やっと辿たどりついたような例の土と垣根だけを見る庭の談義を茶の間でひとくさりしやべると、例によつて庭をぐるぐる廻まわつた。檻おりの中なかのくまみたいに彼は用があつても、なくても、庭をぐるぐる廻まわるくせなのである。何とかして民さん



にしごとを出すものが、見つからないかと捜して歩くのだ、庭と  
いうものはぐるぐる廻つていけば、やり直すところ、向きをかえ  
る物、鋏はさみを入れるものなぞが、自然にわかつて来る、しかし相当  
な手間代になるような仕事は、どこにも見つからなかった。しば  
らくして彼は縁側こしに腰をおろして茫然ぼうぜんと庭を眺めた。そしてや  
つと、彼はかなり大きな仕事であり彼にもちよつとこれには手を  
出すと困るようなものを、見つけた。僅わずかな印税でくらししている  
彼には、かなり重荷になるものだが、どうしても、これはやり  
かえなければならぬものであつた。彼は老職人の村さんとお三  
時の時にいった。

「垣根をそっくり代えよう。」

村さんは驚いてまだあの垣根は三年くらいにしかならないのに、代えなくともよいのにといった。彼はいった。君と民さんと二人でこの仕事をやってくれまいか、外の職人をつかうならこの仕事はやらないつもりだ、二人で仲善なかよく、君はあの人をたすけるつもりで遣つてほしいのだ、昔、この庭を作つた男が鉄屑を拾つて歩いてしていると聞くと、この仕事を出して、ほつとさせてやりたいのだと彼はいった。

「つまり僕はもう一いっぺん遍あの男に庭ではたらいてもらいたいのだ、あの男がうろうろ動いているのが見たいんだ。」

「へえ。」

「垣根はいまやりかえると僕の生きている間のしごとでは、この

垣根をつくるのが大方お終いの仕事らしいんだ、わかるね、このお終いのしごとをあの男にやらせたいのだ。」

「なるほど。」

「垣根は何年持つかね。」

「何の垣根です。」

「胡麻穂ごまほだ。」

「七八年はもちますね。」

「そしたらこれは最後の垣根になるな、もう二度はやりかえなくとも、よいわけじゃないか。」

「そんな気の弱いことを仰おつしやつて、……」

「いや正直なところそうなんだ、そこで民さんとやってもらいた

い意味もわかるだろう。」

「わかります。」

「庭でも家でも、はじめに働いてくれた人はわすられないものだよ、そこで、君が民さんをたずね、どれだけ費<sup>い</sup>るか請<sup>うけ</sup>負<sup>おい</sup>にしてもらいたい。」

「はい、きつと民さんも喜ぶことでしよう。」

「すぐかかってもいいんだ。材料の金は先に渡<sup>わた</sup>すことにしよう。」

「そうして頂けば明日にもかかることが出来ます。旦那は妙なお人だね。」

「僕は妙な人間なんだ。」

胡麻穂というのは黒竹の小枝の葉をふるい、それを揃<sup>そろ</sup>えて仕上

げる垣根だった。仕上りはすだれ文様になり、どうぶちは青竹でおさえ、垣の上は割竹で笠かさを作り棕しゆるなわ栲縄しゆるなわで編みこんだものである。彼の好みのまま、永年この垣根ばかり作らせていた。ただ、黒竹の小枝の揃え方のいかんによつて垣を美しくも、みにくくもさせていた。

翌日の夕方、民さんは村さんと一緒に仕事帰りに来たが、民さんの背後に若い男が一人つれ立ち、彼をみるといねいにお辞儀をした。彼はこの若者を見たことがない、民さんは無沙汰ぶさたをわび、仕事を出してもらえた礼をいった。ところで大体どれくらい費るか、損のないように予算を話してくれというと、民さんは、ええと、胡麻穂が一把わ二百五十円とすると二十把はいるし、青竹は十

本束たばで幾ら幾らになり、棕櫚繩は二十束と見ていくらいくらになります、それに手間代だが職人十五人かかるとすると、それがこれこれになるといつて、すぐ埒らちの行く民さんらしい即答そくとうの妙を現わしたが、手間代なぞどつちに廻つても自身のものだからと、かれらしい大雑把おおざっぱな言い方で二万円くらいかかるでしょうといった。せつかくの仕事だから後でお腹なかのいたむような請け方はするなど、彼は注意して言った。仕事は綺麗きれいに出していただいたのであるから、あとも綺麗にしますと、彼は感激かんげきしていい、きゆうにうしろを振り返つて例の若い男を彼に引き合せた。若い男はまたていねいに彼に挨拶あいさつをした。

「こいつは名をつけていたいただいた二番目の秋彦です。」

「秋彦君だったか、どうもそうらしいと思つたが、……」

脚あしの長いおやじに似た秋彦は、また、鄭てい重ちゆうに頭を下うしろすがたげた。

民さんと村さんは用件の話が済むと、したしい背後姿うしろすがたを見せて戻もどつて行つた。彼は飲みさしの手がついていけるけれどと言つて、和製のぶどう酒を一本秋彦の手に渡した。こういうときは、おやじが受け取らないで、この場合、従者である息子むすこの方が受け取るものであることも、秋彦はこころえていられるらしかつた。庭はもう闇やみが亘わたつていたので、十何年ぶりかで庭を見る民さんは、すぐには庭のもようについては何もいわなかつた。

翌朝、民さんはしごとにかかる前に、おぼえのある彼処此処に眼にとめていたが、かれの最初の言つたことは庭は十五年前とは

ずっとよくなった、どこにもみがきがかかっている、どこでも眼が遊べるようになっていきますと、えらいことを言った。きつと、これくらいには、大せつにまもられてはいると思つたが、こりやまるで、はこいりむすめですねと、久しぶりでかれは奇矯ききようの言葉ろうを弄して見せた。

「しかし旦那、まるで松は半分伐きつてしまいましたね。」

一年に一本くらい枯れて行つたから、十五年間には十五本枯れたことに、なつていた。かれはまた柘榴ざくろ、柚子ゆず、紅梅こうばい、……ずいぶん枯れてしまいましたね、柏かしわ、杏あんず、柿かき、いたや、などはまるで見ちがえるように、枝にも瘤こぶがついて大した木にふとつていまずな、時時、ひよんなしごとをやつていて、ふいにお宅の庭のこ



とを人にもはなしたり自分でもおもい出したりしていましたが、あの時分は木がやすくてすぐに手にはいったが当節では庭を作るということも、家を建てるよりかもっとかかりますね、しかしあの大きい松だけたすかっているのは、全くの拾い物ですね、よかつたですな、かれはそういうと百年くらいの松をくるまで搬はこんだ時の苦心と、町家の間を引いて来るのに困つたと言つた。その時、裏門から音のしないように這はい入つて来た息子の秋彦は、おやじの眼を趁おうて木の間、垣根の際などをことさらに尊敬しなければならぬような眼附をして、ながめた。彼はこんな眼を庭の中で他人から見られたことは、今までになかつた。



## 青空文庫情報

底本：「もうひとつの話へちくま文学の森・別巻」筑摩書房  
1989（平成元）年4月29日第1刷発行

底本の親本：「室生犀星全集 第九卷」新潮社

1967（昭和42）年8月31日発行

初出：「新潮」

1953（昭和28）年

※底本の編者による脚注は省略しました。

※表題は底本では、「生涯《しょうがい》の垣根《かきね》」となつています。

入力：hitsuji

校正：noriko saito

2019年3月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 生涯の垣根

室生犀星

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>